

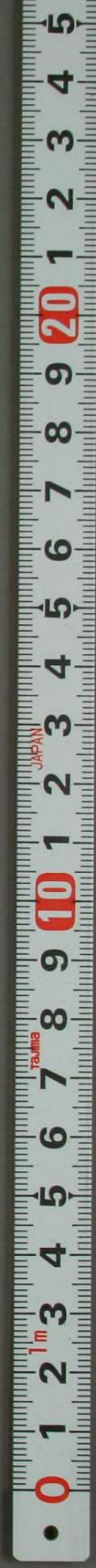


普賢女珠卷

二

於
203
2

15
203
2



や

春笈秋冬春編卷之二

伊勢茂

東都

振鷺亭主人著

旅 203 元

第三齣

百返長者鞠成誦く才子を誡む
濱瀬主人席を賣て佳人と與ふ

儲羽目小のり艶之佐ハ高麗鹿四郎が計略に任せ金澤の街に出く
首飾主店小のり中掃根子の仕貨物荷子成一筋月も整て忽化貝席見
此打扮小容と変は区が先茶坊よまより金澤支庫と申ハ

羽目小のりハ茶博士答てさう金沢支庫ハ御所台の館と申
百返長者の府中ありら路一二丁なりさひんハひ影を石橋
此揚をこて淳の角小建つ事れ家土

伊勢茂

振鷺亭

諸々の書物及び信所の宝蓋りて金澤文庫と申八星あり是
より又板橋成りてた小見の黒門ハ男乃乃岸の入口あり右小見
の赤門ハ女人の学支所れ入口なり是を以て百級長者の門と
なりと申しハ此の巻之依に成りて主を謝て茶店を立寄喚替
を脊負て抵掃と喚ぶる二三丁の路と云ふ所ハ果して大ひき橋
あり橋より申してそのた乃方と見ゆる小橋なる大路ありと申たは
縁どなる松れ並ぶる巻之依此の巻を繞りて前向と申れ即
瓦屋の大社院ありと云ふとの間道のみ一連のと塙を塙乃外ハ
一條の構塹ありとの西岸ハ都てまは松柏柳桃等の大樹あり
其信の中ハ飛觀の高橋あり爰より又二丁の板橋あり是を以て
飛觀前門といふ所ハ斬首のよ七八個の後生脱膊して角抵と

撲わたり又高橋の内ハ大勢女の姿を多くと見ひたりは此の巻依
只見る小高橋の簾と檣の多て敷きの女崩速なる橋よ言罷りて
以後生等が拵乾捻跌見物て真ををば笑ふれ有る巻之依
心の中も思ひるハ彼路にほは肉小もあつたといふの頓踏踏
高橋の上を仰ぎて見ゆると小舟船の中ハ一個の大漢ありと
背小丸花巻を巻いてるまの形違へて體上を力や秀あん
やがて小漢も去て投らま大路の藝と剛なるのさ橋の女崩速を
を見て一齊小咄と笑をあお腹成さげおきぬて笑ひとよまらるる
大漢子ハ面目もろ小丸花巻の傍に艶之依がまねると見て吐
きやう餘ハこゝろは見物なりや胡亂の奴らと云ふもあらず只一打
胡と打別表より忽ち血進るなりてす日争嚷とと衆腕を引て

春長秋冬 卷之二

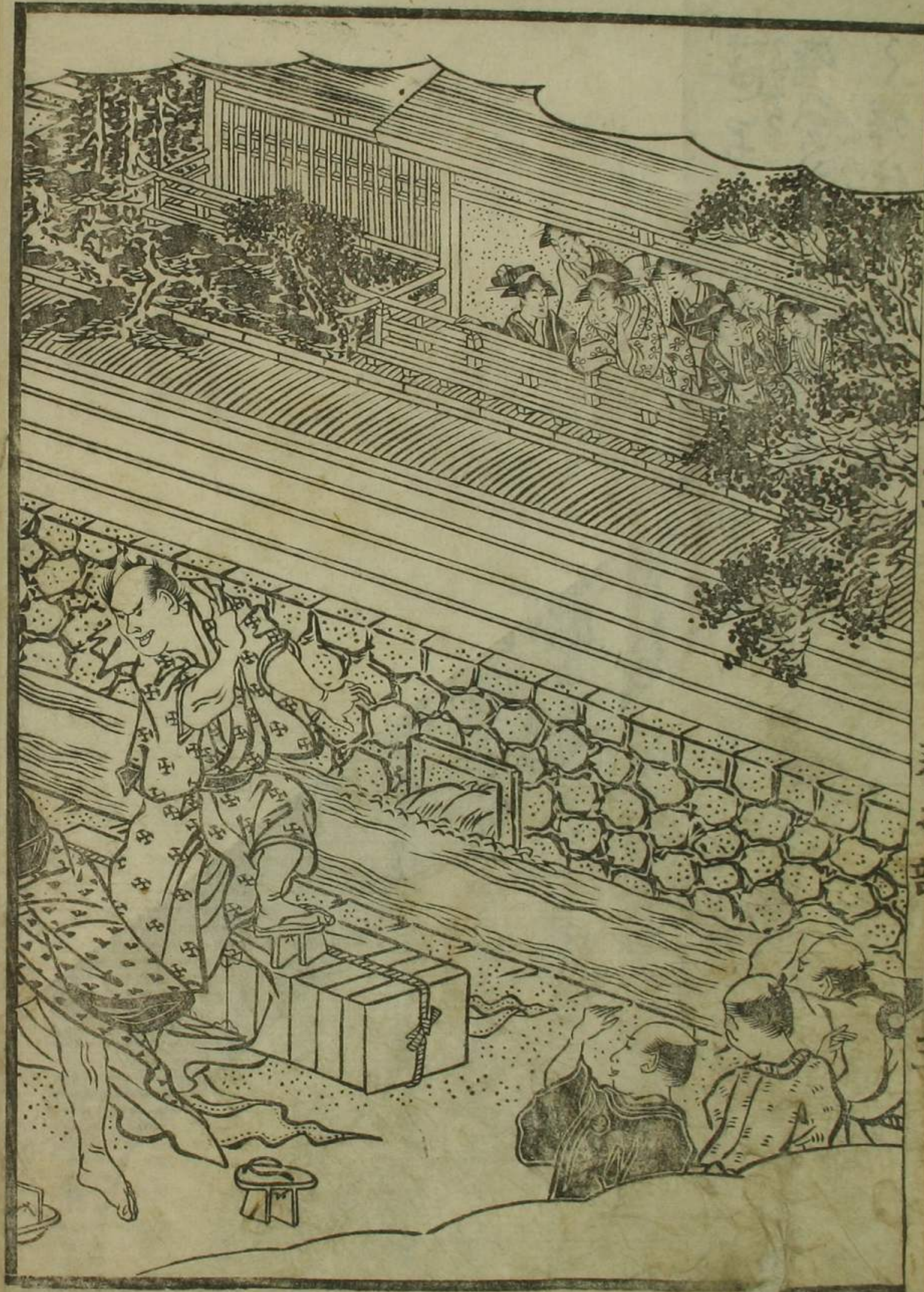
むめ大漢子はいよく吼を狂を罵りて嘲るを一個の後生こを
まやう你まやう角抵子肩て懸るき人もある事やある賈人の心
どやとのさるる小嘩して懸之依が口小嘗させり。ほめて衆は
まうやと拷る打と彼是の虚相住して脚を踢つて戯れ
また磕着て多と捕是か椅中も拘て遂に懸之依と斬の内よ
撞落しう尚つて居のよとるこを撮て裸をたくと擡へあわ
懸之依靴は打殺すのうさる所よ件の字樓の内よとあるよ
との一変來れが忽ち門内よ一人の老漢大に袴を着るるが
きき出來てその後生等小討して你等衆を杖まめよ漢津津
乃作るぞと喚りて其はの後生等忽ち響りてまるは我は家の
夢る者どもあるはま人の命北月べきやうはまき彼奴鳥海

艶冶郎のなとほそ罵り或は鳥乱鳥腔といて哄と笑めてまは
此時懸之依ハ兇者ともある深斬の内小陽落さるる渾身まら
泥水は隠ひ這くの解を爬よとにとるどと懸深くして昇るのよ
ずてむこもを揚て怒り杖なまかと喊びりるの老漢こを又見て
皂隸も又其は此の這廟と杖てあまは指押はりるバ皂隸等
依て勅の内小下を懸之依と杖に仰る海乃よよ揚より小懸之依
満身まらと爛泥は深さ水小濡る荒のどくからるるは言樓の女鹿
こも氏光景然して大小笑ひどよむきぬの老漢も又笑て
甚つち井の水は澆て身を濡れ来と懸之依はを懶腰よ漢は
傍る井乃邊小臨て井水は汲て身を澆き再び老漢が来り来り
と彈伏を老漢がよ事又正さん我は陸つて来るとして即懸之依と

寺裏火入
卷之二



寺裏火入
卷之二



寺裏火入
卷之二

ひわ 庄院の内小入よりさそ此老漢ハ奥女扇の執役官とて皂隸の
甲首^{うしら}に^{すま}高^かく^さ坐^まて^ま餐^を之^を佑^を小^を向^をて^ま去^を休^をへ^るの^者か^るや^何小^{より}りて
争^{けん}嚷^うへ^ぬせ^を絶^を之^を佑^を法^を志^をんで^ま多^る下^を扇^をハ^り而^も道^をご^ら南^を西^を小^{より}法^を
是^こて^ま首^を飾^をの^類を^淨泥^をの^と者^とを^もひ^ぐと^むさ^る小^を彼^を者^とも^何の^好細^を
と^まさ^に小^{より}扇^を或^を打^を撞^をじ^て號^をと^命も^及び^ひと^ん小^{より}救^を済^をじ^る實^をも^謝
奉^をる^小言^をは^とと^てと^しと^涙を^をば^けけ^るの^老漢^が小^を彼^を者^とも^何の^巷乃^を
討^を聖^を火^の後^をる^がさ^らい^ひ小^{より}南^を家^の威^を光^をふ^らて^速も^退散^をし^る實^を小^{より}
あ^やう^りじ^と難^をか^なと^て即^を藥^を或^を與^をへ^衣服^をを^下さ^て一^を駒^をを^り秘^をん
小^{より}小^{より}言^をり^まは^り且^も絶^をと^佑大^のひ^よも^是或^を泰^をと^高後^を刻^をま^らて^厚く^一孔^を
或^中と^よん^とを^遂は^り荷^を子^をを^券負^をて^庄院^をを^去出^をら^りて^此争^を嚷^をを^はじ^つ
後^生と^いふ^はも^平坂^を高^麗に^郎が^部下^の者^とも^出て^餐之^を佑^を法^を志^をんで^家の

鐘^{かね}へ^ま入^りと^参ん^が高^各と^通合^をて^件の^討を^はじ^つなる^は此^時絶^を之^を佑^をハ^り
激^を戸^を搗^をれ^酒楼^を母^めの^えり^のを^りる^小件^乃争^を嚷^を或^をり^つ後^生等^各車^の
と^く坐^をと^列絲^を高^廉に^席ハ^中央^小座^をして^大ひ^よ酒^亭を^りや^る
何^々と^お喚^をて^首尾^をい^ふと^向ら^る小^{より}扇^を之^を佑^を十^分乃^首尾^と傳^を
又^後生^等小^{より}對^をて^今日^ハ泰^をさ^ら由^を成^をの^とも^快く^一款^をめ^て持^をる^も
返^をと^て謝^をと^て圓^金一^塊を^分の^三を^後生^等大^きに^喜び^各
羨^をむ^と志^をして^のを^り我^を々^強劇^をの^とや^りに^徹達^をす^のゆ^えん^と厭^をハ^らむ
つ^まど^も負^を間^ハり^のを^り或^をる^や標^を疵^をの^りや^と急^をも^急も^及ぶ^も
す^まら^しハ^さき^をま^ぎ艶^を之^を佑^をハ^らむ^酒一^石二^斗小^{より}舞^を奥^五六^を集^を物^を持^を
こ^せ整^を齊^をに^雇ま^し持^をせ^再び^庄院^乃同^じの^者と^も執^を役^を友^と訪^をひ
登^を一^孔の^寸志^をり^のを^り件^の品^式進^をる^をば^る執^を役^を友^とこの^物物^を

見て大ひに呆^{あき}呆^{あき}して足^{あし}下^{した}何^{なに}以^も多^たく費^{つひ}を^をた^たしての^のく^くむ^むる^る態^{たい}勢^{せい}の^のや
 態^{たい}之^之依^よが^がい^い某^{なにか}う^う一^{いち}命^{いのち}成^{なり}教^{しよ}後^ごを^をて^てる^るん^んど^ど礎^{いし}奉^{ほう}ら^らん^んや^やと^と尚^{なほ}願^{ねが}ふ^ふ
 矢^やは^は成^{なり}乃^{すなは}ち^ちは^はる^るの^の執^{しやく}役^{やく}官^{くわん}甚^{しん}と^との^の志^しを^を感^{かん}下^げ悦^{えつ}事^じ得^える^るに^にく^く脚^{きゃく}
 皂^{さう}隸^{りつ}も^も成^{なり}よ^よひ^ひあ^ある^るを^を初^{はつ}の^の次^じ身^みを^を披^ひ露^ろは^はる^るは^はる^る皂^{さう}隸^{りつ}も^もと^とも^もな^な
 美^み河^か使^し者^{しや}を^をて^て忽^{たちま}ち^ち唾^つを^を破^{やぶ}咽^{のど}を^を鳴^なして^{して}恰^{あた}も^も矣^や天^{てん}子^し其^{その}あ^あら^らぬ^ぬ
 くる^{くる}が^が如^{ごと}く^くや^やを^を相^あ見^みの^の盃^{さかづき}を^をと^とり^りて^て頌^{たう}ふ^ふ輪^{りん}逆^{ぎやく}小^{せう}勸^{くわん}め^めお^おの^のく^く河^か興^{きやう}は^は靡^み
 り^りと^と或^{ある}へ^へる^ると^と拍^{うた}と^との^のも^もあ^あり^り或^{ある}の^の鉢^{はち}次^じ鳴^なと^との^のも^もあ^あり^りと^とる^るを^を初^{はつ}と^と均^{ひと}や^や
 く^く嘆^{なげ}き^き悲^{かな}し^しむ^む中^{ちゆう}に^にも^も流^{なが}れ^れ石^{いし}子^この^の執^{しやく}役^{やく}友^{ゆう}へ^へ孔^{こう}美^み成^{なり}乱^{らん}さ^さして^{して}態^{たい}之^之依^よ
 お^おむ^むる^るひ^ひて^て傳^{でん}ふ^ふ桐^{きゆう}碎^{さい}作^{さく}て^て矢^や矢^や見^みよ^よし^しを^を中^{ちゆう}に^にあ^あら^らせ^せて^て出^で給^{たま}ふ^ふ女^{にょ}船^{せん}連^{れん}あ^あら^ら
 たる^{たる}は^は首^{くび}飾^{かざり}等^{らう}乃^{すなは}ち^ち用^{もち}を^をて^て如^{ごと}く^くす^す此^{こゝ}以^も後^ごハ^ハ心^{こゝろ}易^{やす}く^く高^{たか}賈^がふ^ふも^も来^きり^り
 れ^れよ^よと^と脚^{きゃく}門^{もん}と^と出^で入^いる^る所^{ところ}の^の票^{きりょう}成^{なり}與^あら^らせ^せ態^{たい}之^之依^よと^とを^をた^たく^く大^{だい}ひ^ひお

喜^{よろこ}び^びい^いよ^よく^く吹^ふ卷^{まき}上^{うへ}に^にく^く態^{たい}を^をの^のと^と新^{あらた}ふ^ふ首^{くび}尾^び十^{じゅう}分^{ぶん}小^{せう}仕^し保^{たも}つ^つを^を飯^いる^るも^もど
 原^{もと}よ^よと^とと^と計^{けい}較^{かく}あ^あら^らは^はく^く態^{たい}之^之依^よ世^よ日^{にち}を^を始^{はじ}て^て日^{にち}々^々御^ご所^{ところ}各^ごの^の儀^ぎに
 出^で入^いと^と下^{した}の^の擇^{たく}き^き洋^{やう}狀^{じやう}と^との^の間^ま々^々河^か者^{しや}葉^{えつ}子^し等^{らう}と^との^のて^てる^る致^し
 は^は憂^{うれ}く^くま^まじ^じみ^みを^をむ^むま^まじ^じぶ^ぶ艶^{えん}之^之依^よを^を良^よ人^{にん}の^のと^とて^て悉^{しつ}く^く吹^ふ聴^{てい}せ^せて^て保^{たも}つ^つ
 なる^{なる}け^けの^の階^{かゝ}し^し行^いふ^ふ女^{にょ}船^{せん}連^{れん}よ^よも^も首^{くび}飾^{かざり}乃^{すなは}ち^ち具^ぐ連^{れん}と^と用^{もち}を^をさ^さて^てぬ
 態^{たい}之^之依^よ又^{また}その^の價^{あひ}を^をい^いて^て守^{まも}る^る際^{さい}最^{さい}と^との^の巧^{たくま}み^みと^とあ^あら^らは^はる^る日^{にち}々^々真^{まこと}
 よ^よう^う玳^{たい}瑁^{まい}に^に抵^{たい}ふ^ふ葉^{えつ}蝶^{てつ}の^の花^{はな}号^{ごう}あ^あを^を環^{えん}葉^{えつ}の^の花^{はな}号^{ごう}も^もと^とも^も更^{さら}に^に
 よ^よとの^の来^きよ^よと^と催^{もよほ}とい^いは^はる^る女^{にょ}船^{せん}連^{れん}乃^{すなは}ち^ち中^{ちゆう}に^にあ^あら^らせ^せて^てお^おむ^むる^る態^{たい}之^之依^よけ^けの^のあ
 お^おむ^むて^て思^{おも}ふ^ふ母^{はは}に^に當^{あた}り^りて^て彼^か路^じに^にが^が夜^よ腋^{えく}の^の花^{はな}号^{ごう}を^を見^みぬ^ぬた^たら^らし^しう^うふ^ふこ^こと^と
 葉^{えつ}蝶^{てつ}の^の花^{はな}号^{ごう}も^も今^{いま}我^{われ}環^{えん}葉^{えつ}乃^{すなは}ち^ち花^{はな}号^{ごう}と^とも^もむ^む女^{にょ}と^とを^をこ^こと^とこ^こと^と路^じに^に
 て^てあ^あら^らは^はる^ると^とも^も階^{かゝ}と^と引^ひ出^でと^とも^も時^{とき}節^{せつ}い^いら^らる^ると^との^の中^{ちゆう}大^{だい}に^に喜^{よろこ}び

急よみ根子乃雕鑄精細お好を造て在院お持まりの執役
 交わつひて奥の首尾を伺ひるがまはひとよ若の執成ふよの所
 ありとて例のどく街お人を絶てきく侍着と来く下官等お勸め汚洗
 救遍巡りる処お怒之依執役おむむひて向ていふ某今日お
 まで清彼お出入仕るといふもいまだ相公を誅しそまのるまの
 頼くハよきお甲もあふバ洋影を遂を冷えや執役おまをまて云
 さあハおまのゆるるお公ハお今庭心よて小童門と氣絶とあをば
 居るおまの足下直お庭心よいきて信お誅し申されよとて即進
 志るおまを怒之依執役官お陸ひ庭門けおのりてお向を伺ひ
 見よハ四隅お松竹檜楓お植るに本場お内お主人百縁とて其
 相款最正くとて龍の眉鳳乃目鼻梁すまてまの年のはハ十
 余

と見よ身お薄花田浮線後景の袍を穿ぬ袴乃衣襟と條兒お描
 足お飛鳳靴を穿たまはハお人乃扈從とち比く氣絶を踏ておのり
 艶之依ハ身を躬め両お玉おつひて氣絶の巻物成るが先おけり
 絶之依が頼屋成然とまき時来りるもやあつたおたつことお廻る氣絶
 百縁接官お不著機舎をうて賜てお六絶おするの空お白縁を鞠輝
 を蹴く直ちお怒之依が身を滾到りるお怒之依元氣おとるま
 ハ一肘の臆量と出死寫書扱とふまを那滾一氣絶お白縁お賜還
 けり百縁とてお怒りて大お喜お給ひ你ハお三何者とて向てお怒
 地とよ誹伏して中るハ下觸お所敵お出入仕る化貝赤見とて
 胡乱よ一通の氣絶を首之候のまを只今傷のまお名は侍毎礼お
 受てまのりぬと怒りお頼を候るまの百縁のまお你が只今のおお松お

一流のういごや此場よ平生の脚法を使ひて存よと尋たれど懸之依再
 三辞返しもまごも辭容をいふを懸之依止のを得とさあつて評
 此中よ入百縁乃相伴よまごまごの此時懸之依心よおのひなるはず
 まて平生の本事成出守る處の精神材料擡ておるは百一箇の
 氣絲縦横上下左右前後を法度小合ひを三日膠膠をのり
 懸之依よ粘在るがどくかまは百縁大に嘆賞し給ひ懸之依をのり
 る你ハ九下の儀表おあらず書を書を債むの事と同なり懸之依
 僕下扇よみれども經書ハいささ記得ぬと答へる百縁又問ふ
 何の經よよて字びや懸之依安否や尚書ヲ習ふれども其実ハ五經
 俱に通ずるといふが字士の周易を長とを曉はじらふ又易經ハ粗
 聴きくると申る百縁とを尋て殊よ喜びたまひ你を物といふまご

と問たれよ懸之依をにく書法をよきま中せりと答へる百縁のこと
 さあバ誠也一准四宝をよとめされはば小黃門紫石研ふ
 黄毛筆竹筒の紙とて持まひり此時百縁心程ふまが詰めてよんやと
 思食もよバ你とるをち此所小便並用と書はどのの懸之依を
 けく思索もよいも及ずしてやがて筆或援しが此處不許小解滿地
 總是在花とさうくと書罷てこよ成捧おて跪きぬ百縁は墨瀟と
 覽て大小懸のき持ひ你よは懸のゆる頗る明人の筆意を於て文徴
 明董其昌が骨肉を書と尋ての你かたうり字同ありぬが物しき
 絶紀をせんよりハ我家よ奉はとる所あるなきやいり懸之依が
 命小遵ひ赤心成拙とけそまらん百縁大よ喜び給ひ我庠乃
 ち寫帖小車を缺るとバ你を宋子とよすべきが你いりをわりの



瀬戸屋



正位
大山積院

春復初冬

卷之二

春之部

給賦きうれん我わが予よとぬるや教しと佑たすけの僕やつ高家たかゝの取巻とらまゐふあづる奉たがるハ休やすま
 上うへとまた造化ぞうかのいさゝ身み乃すなは價あひ成なり中ちゆうところふあづり只ただくいなぐく
 決き之のまいせせてのととるとあふかみひひひをを侍せう女衆にょしゆうの中ちゆうより一人ひとりの
 媳婦よめ成なり揚あつで妻つまとるとのとゆほゆほゆるふおわてハ僕わがが満み足たりめてハ百縁ひやくえん
 是こゝををめてお領許うりやうきまひ婦ふ成なり娶めとるハ人ひとさりの恒つねあり時ときあふバ你あなたがや
 旨あま小こ任ませて死し命めい返へんさして你あなたが名なハ何なにと申まをすと問とひハ此こゝ時とき教しと佑たすけ心中しんちゆうハ
 我わが名なトさぬハ似に来きハはと思おもひはは之の一いち字じ成なり畧りやくして下げ福ふくが名なハ
 絶あきら佑すけと申まをゆるととど答こたぬと申まをしてとる絶あきら佑すけと喚よび慣なりかぐく絶あきら佑すけ
 此こゝ日ひ成なり高たか敏みの奉ほう公こう始はじめして宋そう子しと申まをしては只ただ顧こ書しよ房ぼうの諸しよ生せい等とうハ
 謙へりくだまていさかを誇かこる事ことなくある時ときハ酒しゆ食じき成なり買かひてはハ川かを交ま成なり
 厚あつくはは世よハ諸しよ生せい等とうと申まを信しん彼かせせるるるるるハ百縁ひやくえんハこのよ諸しよ

る等とう乃すなはち学がく問もん譲じやうハ進しんむ成なりて大だいお不ふ審しんふおとを此こゝ一いち本ほんにその中ちゆうハも
 連珠れんじゆ體たい小こ致ちて花はな月げつの吟ぎん成なり做しよる詩し小こ句く句く中ちゆう有あ花はな有あ月げつ如ごと長ちやう空くう影えい
 動うご花はな迎むか月げつ深しん院いん入い歸かへ月げつ伴ばん花はな雲うん破は月げつ窺のぞ花はな好この處ところ夜よ深しん花はな睡ずい月げつ
 明あ中ちゆうと申まをの句く百縁ひやくえん大だいお致ちささままひひここ孺にょ子しの及およぶるるハ此こゝ抄しやう寫ぎ
 とる小こああずずバ必かならずハ人ひと乃すなはち作しよるると申まを諸しよ子し等とうを諸しよ向かうと申まをにに遂つひまかかと申まを
 かくとと絶あきら佑すけが自みづか他たまてととのよららまま集しゆが改か竄せんを加くはは明あ白はくのよりりバ
 百縁ひやくえんいいよよくく致ちささままひひ向かうのありり題だい成なり出でて試しるるハ絶あきら佑すけが詩しハ宋そうの巨きよ山さん
 ぐ風ふうありととままままれれとの才さい成なり遺いハ寵ちゆう也や日ひ々々ハハ孫そん惜じきぬぬ法はふ處ところハハ庫くのよりりハ
 み使しりりままれれハ百縁ひやくえん絶あきら佑すけははととままととの事こと成なり横よこ志しむむハハ所ところの行ゆひ
 毫ちひ忽かを私しわわくくままとと他たのよりり給たま仕しのよりり身み々々を春はる冬ふゆ甚しん至しるる有あ日にち絶あきら佑すけ
 熟じゆくハハひひるるハ我わが原げん来らい尚しやう敏みハ身みを屈くする事ことハハ路じゆ成なり成なりたたららべきべきなる

たるるるは寂法緊して男を終に曹局の内よ入るかなひぐされば
 今日小あるまで路に高次なる事はわくむねなる月日を重ぬるもの
 うたてさよとて惆悵とて燈す以ても霖雨のつよくなる借も房もあつて
 むとを琵琶を操持して平教をぞめる若附近衛院の朝も頼政
 鶴を射け思賞して教書の為蒲乃前を宿の法もも揚にこそ乃
 故兼成今我身のうも比へは心をまえて弾きける此時百縁八相
 乃上座服足小梵里仄も耳侍て居る面ひが演濃主人もむらむら
 のこりやうあは聞かぬいま艶佐が琵琶の一曲心も感とるところありて
 東よよとて悔つると覚るの這漸とあはれの時節を以書さるものを
 許してきてん東成終小某無依領掌うとに記が書さるは年録を
 まて書をなるところぬ這漸いま我府中におおく得た人なる備他も云

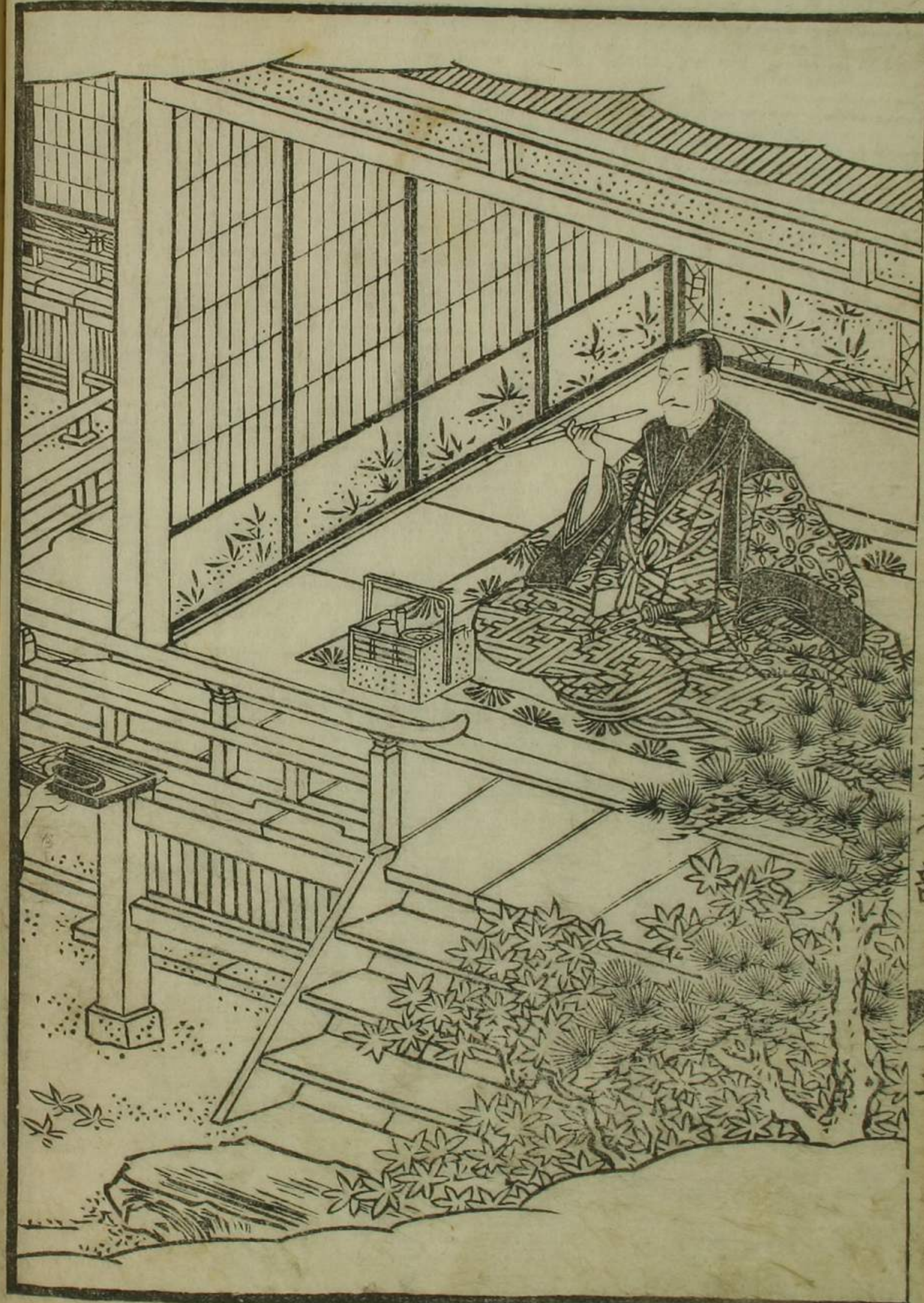
りあは八膳うんを一人乃侍女を興へ書とほ這漸が脚を繫とて免
 書房の主管とることをと思ふものとのりなれば主人を喜び終ひて吾儂の
 こととあはれこの這漸も小心馴謹る事ハ重く君の知己とあはれなる
 然れども年壮して主管にりやるとん東縹身もての重うはれとて
 侍女の中成配せるともおおては家の規矩をもとてまへは西便よ
 けうらんさやかたう縁乃東へのまが自ら擇むも海うさまう買うらんを
 彼中なる百縁此理も許容あり急ぎ烟夜を可被枕浩もて愛するもの
 艶之佐金澤文庫乃印成書ふ
 男女川所谷の小史を編む
 高夜演濃主人押班老媽をのりて可被仰射者ありとて艶佐とて
 艶佐ハ何事とあると急ぎ書院も床に天席をてて見渡せハ正百す

第四齣

茵褥成構へて一伎の演漱ま入地白の柄箱を隠してらんく座待ひ
 待女三十餘人宛ねふ二行の座排列うり各々の装を飾り美成
 蓋を拾われ一班の仙女王母娘娘を旗擁し瑤池のよま夜が
 正しく四方より許きの修福と輝煌「奉の體美を志くてもも目差
 志くそらんより形依は事情をえて嚇得して心深突さるしつれども
 心の中大抵情して何となく被撥合て何居りその附押班老媽ま
 人の命を愛く整佑もむらびて中なるハ整佑平次小心を束を勤
 の条の満足と思ふこと今若き管子命「毎なるべき西よ書みくしてハ
 束縛さるも似たり依て一人の侍女を国の御に揚ぐんとの約束ありこれども
 縁の束への思ふもよる盤うは今此侍女衆の中におおて一人脱す
 登れものをさるる播ゆじとの決意ありとど暢よる整佑を安めて

心中にてハ謀成ぬと願ひ胸打騒ぎられども故志とてりあふさ
 體こそ只天なき者をの「答」はしく一代の身乃倫と恥る処もあふと
 きると首をあめて眉が皺臉と張腮小延を生すさる晴を定て
 尤の坐より右乃坐を熟くと見回るよいさの標致十分小優りある
 女史後よりとらふもの情人路に小似るハ一人をあさりぬき「再見
 同さるの一遍一けいよよく路にハ居ざりしハ心程脱帳一嘆然とて
 言と生さばうま入老媽をて同さるるやう整佑あふ書きをん定れ
 ゆびのまはも吳俊き場えんとの作らうとありさども整佑ハ「一言
 の答りく首と低てどおう主人の躰を覺てとに不慮たまひ保を
 むきハ今此二十余人の侍女の中よ條が意を恨らる者死年また
 他も物せし者あつて進退を安せざる年と直あ端を女と此外の

春集秋冬 卷之二 春之部



春
集
新
夕
卷
之
一

春
之
部

十一

上首極あつた速中ゆじと作らば後依護で主人の中奉る僕を其の媒約
 蒙りけりまゝ擇べき事を許たまへり実生花の両目粉身はるる
 必隆恩乃頼に依るに兼耀は中条よりいとも主人随身の侍女は
 還ら乃席もと依る者ありといふは免のまひり然るはなく觀
 世免給らんやと申されたまへり笑せ給ひ你吾儕が志高けきありと
 疑ひていかに此席も除まざるの二人あり樂多き源きをありて一
 夜ハ辞世かき出さるる齊しく喚出て你を給ひを満すといふ節老好
 小命して件のに名の女児を居し事此附懸依らるの路にや出奉ると待
 取小頼りて韓紙門外にむらき驟小出奉る成はばまら若ははハ
 赤衣をまゝる般井も其次に出来りハ黒衣をまゝる富里も其後
 に出来りハ白衣をまゝる路里も其次に出来りハ青衣をまゝる

路にりしが二人は人乃此月後も坐けるを主人迎く前に進ませてひと志く
 蟻炬光を懸て懸依りて人を見せりて其を路に若日午姿
 宛然と目も隆るを懸依りて(と嘆を合て羞慚而も満老鳩はと
 此趣成曉中を催おる目も中にも多るに懸依り流石あからぬ
 云がく路に指くろの老好も告てまらハあまあまする信色の衣を
 を懸ける婦人いまの定まるはまらまらと申けは主人喜々歡々と
 のこの中う你心あまの宿の妻も揚ふはれが但路にいふもどやとてこの両を
 回顧て微々として嘆を給ふ路にハ満面も通ひて時の両目も
 餘りてぞ見えまら主人のこの中う微高蒲前にもれとを懸に還
 佐が妻として能くうが懸依りて源三位の機あり明日宛と乃若日
 かまは五言解と申をいして寄成候ふ返今宵はまら兩人あまく返て

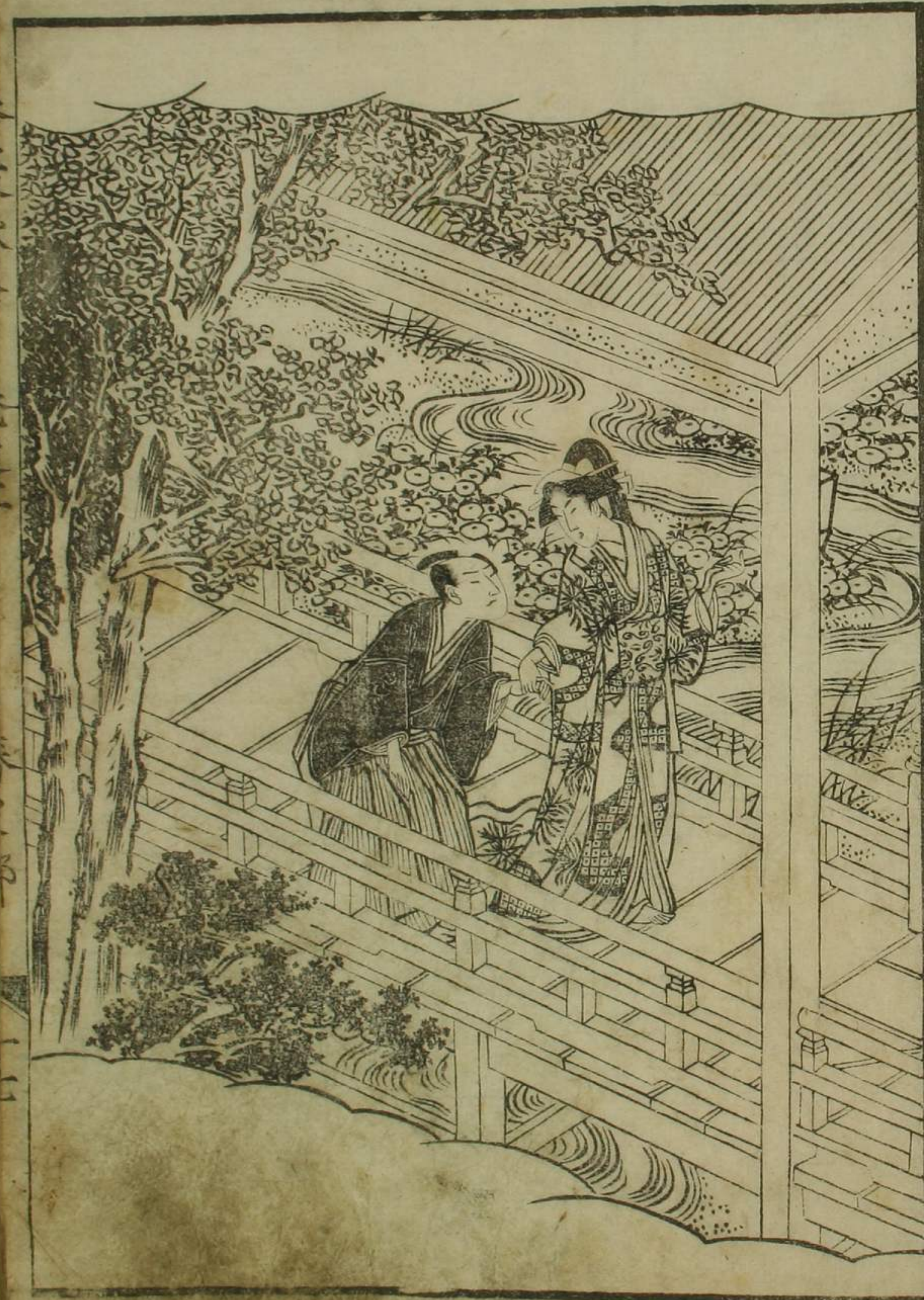
明日式侍とて車も味をいふと一対のまはり敷院さんふ諭ん方うく
ま人を二拜九拜とてその坐をいりて房小退きんは各各さるはるり
まをわくして翌日主人乃さういひて花燭乃乳車一悉く燭四の整正ひ其
床帳家伏物して備る事うりけり此夜同僚の侍女連路にを
整結る房も送るいふ大ひ酒宴を後くお申願言よとぬき玉構れ
八る代いつりすぬく此衆杯成巻て相加因敷を遣人く教いぬ
後若小蘭房に今合整成のまはり路に整結も向て咲を帯て
けるは若いふとの後も有まん西きくんまうせるやうかる整結を
望み微笑てえくるハ某が向をさるるまをいへハ先川身乃さるる向
ま路に若んとしていふ猶成掩てえ若く花号ハ環集まていふ言や
整結いふいふも若る川身の花号ハ集集いふ其に若もいふわく

よく龍得せり路にがえとの程とあるとも橋崎檢校をりて若く若
小福と楊はじりいれ是さるるやとて所ち描金小書画(盒子をとらば
なれど整結のふ某も又川身の楊物を下持りて所ち錦の体も
色さる整鏡をとる出て此時兩人は若く相遇る事を後ると
互に笑つ所いぬ路に又回てさるるも若く九下のまにさるるわを
うり川身を匿れしきさるるはたの故いふも若く実もいふるは方
て西身をど真乃川姓を衣圍せさるる整結のふ某もいふ相様團乃
役人小田原れ澤田艶之依かうさる川下流に若く若く若く若く
扇さる媒をいせよ事情を区心るるあさる若く若く若く若く若く
を寢さるるハさる小録の権許は川身と風根の宿縁も因やま
よの情愿詰ひをさるま書と他うさるるにさるる此不も留る

きふたの夜明日ひとあふ小田東ふおとむらぐり身と共ふ夜を流る
徳老の盟書を圖とんと思ふや個の身よく其に味ひて以銀を忍び
出んやいふ路にうたててととと此の身の高名のりさきり忍ふ金乃
軀成のやくのちり身傳りりもひさるささいうも比てさる命も後らるる
あらんやあそと相むるで晴お親とあそと雙栖て一身を共しせんかま
うもさるひもさる妻がはるるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
中もさるの整之体も大ひも脱でさるる身流俗中よおろく名士を
識まの株もに排保済の流わり奇偶のさるる身が花号の是
兼蝶我花号のよと環さるるは工也平株儀徳の清時重陽
乃若さるの宴をせさるたのよさるさるを清政の標さるらるるさる
りづさるさるをさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

とむらはく紙窗の斜月さるらくと差ゆる程逐よ雲と取り雨とらる巫山乃
夢をむすびぬかくて艶之依まぬいよく莊院を脱出さる用きをさるさる
府中の専要が細くふかたさる一本の簿子とは又房中乃夜服金銀の
及も京帳器皿のさるさるさる所さる取らる一帳とは又各人さるさる
一物も受用せびて悉く時日をさるさるさる帳目とは共さる三宗乃簿
子して書厨のさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
出入せさる字察をさる取らる朱印の稟成候す時さる艶之依の書房中の
主簿これと黒印をさるさる路に又朱印をさるさるさる二つの印塵をと
もれは陰肉のさるさる鎖しその鑰匙を即換の上は掛あき又詩文章章さる
乃係系ハ系心く燒棄りり又此處をさるさる書置として壁間ハ一首乃
詩を題さるさるさる又府中の男女子も不陪人あさるさる巴門の出入をゆる

春集新巻 卷之二 春之部 一六



さる後さるのバ整之依はるを路にほ残りてえりふハ我くえより不義は
 く以處我投奔者ふあさるは明くふたご白日も退く道と即元門
 を出き計較をめぐじ其羽日も到にハ早服以元整之依ハ張三
 李四ふふ二人の小吏を呼日く西人今自称名者(代集)も信るなり
 西人ふく彼の處もあもむき廟所を掃除して秋多成待じと云り
 張三李四二人の小吏を呼日く西人今自称名者(代集)も信るなり
 おそれく二人の小吏が後ハ跟随後ろく元門を出て府中をこるは豫念
 道をはいて落めきさる書房の諸生ハ彈二といふ者との日己の越さ
 まで整之依が房の戸領してありるを怪し門の動靜を看てあはバ逃徒
 なる撰振よき整之依路に若ふ人(ど)火の業もさるらるはバさてハ主婦投奔
 ありさるのあんと急きかくと音告りて百縁公若を写取て即書房よ

けり廣れをた用きて看たりふ竹物一とさるるて教を死て帳目ほ
 明白も登記してあり白縁思ひふふ其故何とも知さる所も急整間の
 香燭も燈棄て奇南の馨茶かきとて鼻ぬ編を頭を擡く只
 月並ハ登とれハ句の詩あり
 擬向金龜洞裏遊
 願隨紅拂同高路
 好事已成誰索笑
 主人若問真名姓
 百縁下ともの一遍一拾ひ讀の意をありふはの直の取はと急整間の
 又何の意故を知れと集きて一跡の行もは後も身退く成似くえは
 客の曲事なり半とありふは材物一毫と私せずと急整間の士も原より
 行綜端爲可人雷
 敢向朱家惜下流
 屈身今太尚含羞
 只在艶佑兩字間

夫婦の事ハ誰を憐むのらん其路に又何事の旨報あつて乎集に陸ひ
 逃走しや夫婦が喜いに先測かに世に希有の事かうれさるんばあ
 へつ流しに解解書をさして弾二小五成に依他路に
 有人成意を捕(東區)吃多るものれ余にたまた弾二思つて獲のとを
 言くして馳出らる叔を又張三李に二分小吏ハ欄名寺より路依
 路に今や来るのと居居けにいま路依夫婦来るにさすのに張三よ
 向てさう時すよと平の左側より人々来るさうハ我々欺れらるや
 張三がさるに我々廉忽ものなるハ張三の神子城垣はいつすと伝
 林名寺の揚系と(文達)と志すのさや張三の方を尋ねるにさや
 李にさよ同二人共ニ林名寺を打出る張三のよと到るに張三と
 弾二も初合らる張三息張五と張依路に投(海)さよよとて捕人にて

集にさよとさよ申しられた張三李に大ひと驚きさよと我々集に陸ひ
 して欺くさよの落たるにさよ共々集を捉獲しとて二人脚を走せて
 さよは郷の梢驪乃頭よりさよの封境の衙門にて債小媚牌場あり弾
 二も件の相親書を榜文と翻つ多眼を依てさよの某とさよ小亡命人も益
 乃程の街の中ハ縣もて夜も夜もさよとてさよ落来るんらと債のさよは究
 場所さよと張三の者俱に債の園酒店の奥も今亮橋子の肉よりひ
 ところ往來を伺ひ居るめくさよとてさよとて張三依路に夜よりさよ初て地
 衙門までさよと張三とを計もさよの故意と日中のゆきさよと張三と
 許より行て執りさよと張三とありさよは人集をはわつて張三依路のさよと
 思ひの後の榜文をさよと張三と見るさよは甲取摸様を(寫)を捉獲
 さよと張三の五十貫の賞金をさよと張三との文書ありさよは債も張三も張三も

後少人^{ちうじゆう}在^あてあ人^{あにん}が背^{せみ}を拍^たひてあ人^{あにん}が命^{いのち}も動^{うご}くもあはれと嘆^{なげ}き者^{もの}ありあ人^{あにん}
忽^{たちまち}ち一塊^{ひとくわい}とちりて身^みを回^まて後^{ちうじゆう}を肴^やるあ人^{あにん}容貌^{らうがう}魁^{けい}偉^ゐは膚^{くわ}甚^{しん}肥^ひ向^{むか}て
東^{とう}園^{えん}一の力^{ちから}をたきとちりあ人^{あにん}た右^{みぎ}の腰^{こし}脅^{おそ}を陣^{じん}てあ人^{あにん}が毎^{まい}夜^やと控^{ひか}まへて
此^{こゝ}園^{えん}酒^{しゆう}店^{てん}の肉^{にく}も引^ひて入^いる人^{ひと}即^{すなは}ち懸^かり向^{むか}て去^さるあ人^{あにん}が今^{いま}今^{いま}この榜^{ぼう}文^{ぶん}を
ぬ捕^とへる者^{もの}の五^ご十^{じゆう}貫^{かん}の賞^{しょう}銀^{ぎん}を奪^{うば}つて歸^{かへ}る者^{もの}の其^{その}罪^{つみ}を究^{きゆう}問^{もん}良^ら美^みを
んとあ人^{あにん}の物^{もの}附^つの足^{あし}下^{した}あ人^{あにん}源^{げん}と深^{ふか}き籠^{かご}あまの縁^{ゆかり}放^{はな}りて身^みをの退^{あひ}れ控^{ひか}
るも其^{その}某^{その}の二^{ふた}男^{おとこ}女^メ川^{がわ}滝^{たき}と助^{すけ}たりの賞^{しょう}銀^{ぎん}も眼^{まなこ}をにぬ取^とり去^さるあ人^{あにん}が某^{その}
あままりてとちりあ人^{あにん}の足^{あし}下^{した}あ人^{あにん}の落^おちたると思^{おも}へてあ人^{あにん}の懸^かり向^{むか}て去^さるあ人^{あにん}が今^{いま}
乳^{ちち}を速^{すみ}て既^いに酒^{しゆう}店^{てん}を去^さる人^{ひと}に也^{なり}と忽^{たちまち}ち強^{かう}二^{ふた}亮^{りやう}榻^た子^この内^{うち}より瀧^{たき}と下^{した}路^ぢを
掴^{つか}りて你^{あなた}の傍^{そば}にうづもつ腕^{うで}すべきととて嘆^{なげ}のるあ人^{あにん}の罵^{のの}りてあ人^{あにん}の傍^{そば}に何^{なん}れ
訪^{まわ}りてあ人^{あにん}の路^ぢを圍^{かこ}ひて三^{さん}拜^{がい}を手^てに強^{かう}二^{ふた}の直^{ちゆう}を授^まけてあ人^{あにん}の路^ぢを

遮^{しや}りてあ人^{あにん}の男女^{おとこメ}川^{がわ}を渡^{わた}るに大^{おほ}きな嘆^{なげ}もつ掴^{つか}り強^{かう}二^{ふた}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の
出^でけに強^{かう}二^{ふた}の中^{なか}の腕^{うで}を酒^{しゆう}樽^{どん}の蓋^{ふた}をおおて直^{ちゆう}例^{れい}も下^{した}に強^{かう}二^{ふた}の腕^{うで}の中^{なか}より
運^こぶら酒^{しゆう}の泉^{いづみ}のどく外^とも發^はつと道^{みち}の酒^{しゆう}店^{てん}にまはるとも強^{かう}二^{ふた}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の
傲^{おご}りて懸^かり向^{むか}て強^{かう}二^{ふた}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}る
男^{おとこ}女^メ川^{がわ}を渡^{わた}るに強^{かう}二^{ふた}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}る
右^{みぎ}の腕^{うで}を強^{かう}二^{ふた}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}る
勇^{ゆう}まに腕^{うで}を強^{かう}二^{ふた}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}る
かじ強^{かう}二^{ふた}の腕^{うで}を強^{かう}二^{ふた}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}る
とち強^{かう}二^{ふた}の腕^{うで}を強^{かう}二^{ふた}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}る
強^{かう}二^{ふた}の腕^{うで}を強^{かう}二^{ふた}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}る
強^{かう}二^{ふた}の腕^{うで}を強^{かう}二^{ふた}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}るあ人^{あにん}の腕^{うで}を握^{にぎ}る

中ふおにまれく忽ち酒を碎て而火の燃ゆるが如く其は深き深き血飛り
かみく執出がうみ瀾々踏をとして血の跡踏をを舞は依路にを
志や祝と把て流りて男女川すうまじ信にまゝ提桶をきり執り
弾二が羽よお入るは氷の覆りて流るる流るるす男女川は川を
く送たじとて二人も花目合世に其の舞を依り路にを引く意に
篠倉さして流るる男女川はを流るる勝おのけて取れは諸人
悉く恐くまじく遮りて住んぶる者首目て一人をあるまじり執りて
才駒をうりてはれ志今の流のむとんとおまふとら男女川流流を立
出く恰も小山にゆるめら如く大踏踏洋洋とあまふ大なるよま路
我聞ひく通あり

春暮秋冬卷之二畢



